

《研究ノート》

食感を表す擬音語のおいしさ関連性は表記形態に左右されるか

生 駒 忍

Does orthography affect palatability-relatedness of Japanese onomatopoeic words representing food texture?

SHINOBU IKOMA

キーワード

オノマトベ (onomatopoeia), テクスチャ (food texture), ひらがな (hiragana), カタカナ (katakana), おいしさ (food palatability)

近年、オノマトベを用いて人間の感性をとらえることへの関心が高まりつつある。消費者行動につながる感情の表現としても注目されている(清野・玉置・滝口, 2011)。そこで注意すべき問題として、それらをひらがなで書くかカタカナで書くかという表記形態の選択がある。文部科学省は、オノマトベのうち擬音語はカタカナで、擬態語はひらがなで書くことを推奨しているが、どちらであっても意味は通ることもあり、実際の用例では必ずしもそのようになっているとは限らない。生駒(2012)は、触感を表すオノマトベの表記形態に関する質問紙調査を行い、擬態語においてもかなりの割合でカタカナ表記が用いられていると見られていることを示している。しかし、どちらを用いるかによって、得られる感性的な印象が異なることも報告されている。矢口(2012)は、食感(テクスチャー)¹⁾を表すオノマトベについて、モダリティ・ディファレンシャル法(鈴木・行場・川

畑・山口・小松, 2006)を適用して五感の各モダリティとの関連性を検討した。その結果、擬態語では聴覚、味覚、触覚に対する関連性評定で表記形態による相違が見られた。聴覚と触覚はカタカナ表記の場合に、味覚はひらがな表記の場合により高い関連度が得られた。一方で、擬音語では表記形態の影響はほとんど認められなかった。

矢口(2012)の知見からは、オノマトベを用いて食感をとらえる場合に、擬態語を用いるのであれば表記形態に注意する必要があるが、擬音語であればその必要は低く、特にこだわらずに用いることができると考えられるかも知れない。しかし、そこで得られたのはあくまで感覚次元そのものに関してのもののみである。オノマトベを考える上で五感を出発点にするのは自然なことではあるが(苧阪, 2008)、矢口(2012)自身も述べているように、美しさや不快感といったより心理的な要素との関連については不明であり、実証的に明らかにすることが求められる。

そこで本研究では、食感を表す擬音語について、モダリティ・ディファレンシャル法を援用しておいしさとの関連性を検討する。食感とは、味と同等あるいはそれ以上においしさ貢献す

1) 矢口(2012)を含め、「テクスチャー」ないしは「テクスチャ」との表記も古くからみられるが、心理学や感性工学の分野では、繊維製品の手触り(例えば、鋤柄, 2009)、視知覚における連続性を持った面(例えば、関根・菊地, 1995)、絵画の筆遣い(例えば、中井・蓼沼, 2002)といったものにも用いられ、多義的であることから、本稿では「食感」を用いる。

る特性である（柳本, 2002）。おいしさは食品の評価においてとらえられるべき最も重要で究極的な感性であるといえ、五感のそれぞれに関しては表記形態の影響がほとんど現れなかった擬音語であっても、おいしさへの関連性に影響があるのであれば、感性評価等に用いる場合には十分に注意すべきである。

方法

調査対象者 大学生64名（男性15名・女性49名；平均年齢20.2歳）に質問紙への回答を求めた。うち32名はひらがな表記に対する評定を、残り32名はカタカナ表記に対する評定を行った。

質問紙 矢口（2012）が取り上げた食感の擬音語である「パリッ」「コリコリ」（本稿中では便宜的に表記をカタカナに揃える）などの計15語それぞれについて、おいしさにどの程度関連するかを、「1：全く関連がない」～「7：非常に関連がある」の7件法で評定するよう求めた。ひらがな・カタカナとも、全てフォントはMSゴシックとした。また、日常の書記言語接触経験との関連を探索的に見るため、直近1か月の読書量を、読売新聞社が読書週間に際して毎年行っている調査と同様の質問（7件法）によって尋ねた。

手続き 集団で質問紙を配布し回答を求めた。いずれのデータも、調査対象者が食事直後あるいは強い空腹状態であることによる回答のゆがみを抑えるため、16時過ぎに収集された。

結果

表記形態ごとに、15の擬音語それぞれに対する関連性評定値の平均を算出したところ、表1のようになった。

それぞれの語について、ひらがな表記での評定値とカタカナ表記での評定値との間に差が認められるかどうかを、対応のない t 検定によって検討した。その結果、「ジャリジャリ」で t

表1 表記形態ごとにみた食感の擬音語のおいしさ関連性評定値

	ひらがな表記	カタカナ表記	t 値
シャリシャリ	4.88	5.06	.48
カリカリ	5.44	5.28	.42
バリバリ	5.94	5.69	.88
サクッ	6.31	6.09	.88
シャリッ	4.38	4.66	.64
コリコリ	4.81	4.53	.70
シャキシヤキ	5.56	5.84	.86
ジャリジャリ	2.72	1.94	1.91
ジュワッ	5.22	4.97	.59
シャキッ	5.06	5.09	.09
サクサク	6.09	6.06	.12
バリバリ	4.75	4.56	.45
コリッ	4.00	3.69	.67
パリッ	5.28	5.47	.54
カリッ	5.56	5.41	.42

(62) = 1.91 ($p < .07$) ではあったものの、有意差はいずれの語においても認められなかった。

読書量との関連を見るため、その評定に回答漏れのあった1名を除いた63名のデータを対象として、生駒（2012）と同様の基準を適用し、1か月の読書量がゼロまたは1冊の29名と、2冊以上の34名との2群に分けた。各擬音語について、両群間で評定値に差が認められるかどうかを対応のない t 検定で検討した。その結果、有意差はいずれの語においても認められなかった。

考察

本研究では、食感を表す擬音語において、ひらがなで表記するかカタカナで表記するかという表記形態の相違がおいしさとの関連性の評定に影響するかどうかを、質問紙調査により検討した。分析の結果は、少なくとも今回取り上げた範囲の擬音語においては、表記形態の影響は認められないというものであった。本研究は、矢口（2012）に比べると調査対象者がやや少ないが、そのために母集団における差が検出できなかったとは考えにくい。本研究は矢口（2012）と異なり、表記形態ごとの対象者数を揃えてあり、G*Power3 (Faul, Erdfelder, Lang,

& Buchner, 2007) を用いて検定力を算出するとわずかではあるが矢口 (2012) を上回っている ($d = .8$ の場合, 本研究で $\beta = .883$, 矢口 (2012) で $\beta = .874$)。したがって, 擬音語に関する心理的な要素のうち, おいしさについてはひらがなかカタカナかという表記形態の要因には関連性が左右されないことが示唆されたといえる。これは, 擬音語に対しては五感への関連性に関して表記形態の影響をほとんど認めなかった矢口 (2012) の知見を, 個々の感覚モダリティにとどまらないより高次の面についても拡張できる可能性を示している。

おいしさ関連性の評定には, 読書量の多寡による影響は見いだされなかった。よって, 少なくともそのような形での書記言語への接触頻度が関連性評定を大きく変えることはないことがうかがえる。もちろん, ここでは一般的な読書が対象であったが, 例えば今日の若者にとってなじみのあるマンガではオノマトペが広汎かつ効果的に用いられており (高月, 2010参照), 「読書」に含まれないそのような個別的な活字メディアからの影響の有無については不明である。

本研究では食感に関する擬音語を取り上げたが, それ以外にもさまざまな擬音語が存在する。今後はそれらについても検討を行うことで, 矢口 (2012) や本研究が示したような, 表記形態からの影響が認められないという特性が擬音語一般に共通するものなのか, それともあくまで食感に関する擬音語に特異的なものなのかを明らかにすることも求められよう。あるいは, 擬態語で表記形態の相違が影響するという

矢口 (2012) の知見が, むしろ食感に関するもの以外には当てはまらず, 食感の擬態語だけがオノマトペの中で特殊であるのかも知れない。

引用文献

- Faul, F., Erdfelder, E., Lang, A.-G., & Buchner, A. (2007) G*Power 3: A flexible statistical power analysis program for the social, behavioral, and biomedical sciences. *Behavior Research Methods*, 39, 175-191.
- 生駒 忍 (2012) 「触感を表すオノマトペの主観的ひらがな/カタカナ表記頻度」『日本認知心理学会第10回大会発表論文集』, 40.
- 清野誠喜・玉置 怜・滝口沙也加 (2011) 「食品のクチコミにおけるオノマトペの効果」『農業問題研究』, 47, 249-254.
- 中井隆洋・蓼沼 真 (2002) 「絵画におけるテクスチャの物理量と心理量との関係」『映像情報メディア学会技術報告』, 26(33), 25-29.
- 李阪直行 (2008) 「感性の認知脳科学—擬音語・擬態語の脳内表現—」『國文学 解釈と教材の研究』, 53(14), 50-57.
- 関根道昭・菊地 正 (1995) 「広い視野におけるテクスチャー分離」『心理学研究』, 66, 91-99.
- 鋤柄佐千子 (2009) 「表面テクスチャの感性評価と物性」『日本機械学会誌』, 112, 414-417.
- 鈴木美穂・行場次朗・川畑秀明・山口 浩・小松 紘 (2006) 「モダリティ・ディファレンシャル法による形容詞対の感覚関連度の分析」『心理学研究』, 77, 464-470.
- 高月義照 (2010) 「マンガにおける表現技法の進化—何がマンガを文芸に成長させたのか—」『東海大学紀要 開発工学部』, 20, 53-75.
- 矢口幸康 (2012) 「テクスチャーを表現するオノマトペの感覚関連性評定に表記形態が与える影響」『認知科学』, 19, 191-199.
- 柳本正勝 (2002) 「食べ物のおいしさに関する各感覚特性の貢献度」『日本調理科学会誌』, 35, 32-36.